

客家語の発話動詞"va (話)" "kong (講)"の文法化について : 『客家社会生活対話』における出現頻度の違い

| | |
|-----|---|
| 著者 | 田中 智子 |
| 雑誌名 | 研究紀要 |
| 号 | 22 |
| ページ | 89-98 |
| 発行年 | 2021-03-10 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1084/00000854/ |

客家語の発話動詞 “vá (話)” “kòng (講)” の文法化について

—『客家社会生活対話』における出現頻度の違い—

On the speech verb “vá (話)” and “kòng (講)” in the Hakka language: With special reference to *Conversations chinoises prises sur le vif avec notes grammaticales: Langage Hac-Ka. Vol.1-2.*

田 中 智 子*

Tomoko TANAKA

Abstract

This paper presents a tentative study of the distribution of the speech verb “vá (話)” and “kòng (講)” in Hakka language. This paper collects and counts the examples of the speech verb “kòng (講)” appearing in the *Conversations chinoises prises sur le vif avec notes grammaticales: Langage Hac-Ka. Vol.1-2*, which is a Hakka conversation text compiled and published by French missionary Charles Rey in 1937, and compares it with the other speech verb, “vá (話)”. This paper points out that (1) “kòng (講)” has a wider range of usage as a verb than “vá (話)”, but (2) its quotative usage is less frequent than that of the verb “vá (話)”. This fact suggests why “kòng (講)” is used as a main speech verb in modern Hakka language and “vá (話)” has developed into a complementizer.

キーワード：客家語 発話動詞 文法化 quotative

I はじめに

台湾の高雄市美濃区で話されている客家語^{注1}では、発話動詞として主に「講 kong42」が用いられる。そのほかに、「話 va55」という発話動詞があり、こちらは「忠告する、説得する」という意味で用いられる。

(1) a. ia42^{注2} ke55 sii55 kong42 het32 e42. [這件事講忒吔]
これ の 事 KONG_{言う} してしまう ASP^{注3}
「このことはもう言いました。」

b. ia42 ke55 sii55 va55 het32 e42. [這件事話忒吔]
これ の 事 VA_{忠告する} してしまう ASP
「このことについてはもう（誰かに）忠告しました。」

さらに「話」については、老年層の協力者の発話の中で、少数ではあるが、補文標識として用い

* 関西国際大学現代社会学部

られているのではないかと考えられる例があった (例(2)(3))。

(2) a33kung33 kong42 va55 ia42ke55 han11 he55 fan33su11 kuang42。
 おじいさん KONG VA? この やはり COP さつまいも 蔓
 [阿公講 VA (話?) 這個還係蕃薯梗] 「おじいさんはこれが芋の蔓だと言った。」

(3) ngai11 ti33 va55 ia42 ke55 t'ung33si33 he55 ma42ke55。
 私 知っている VA? これ 品物 COP 何
 [我知 VA (話?) 這個東西係甚麼] 「私はこれがなにか知っている」

台湾の客家語では「話」は動詞として用いられることが少なく、補文標識として用いられているのは「講」の方である (江敏華 2018: 721)。しかし、もし例(2)(3)に見られる「va55」という語が「話」に由来したものであるならば、美濃の客家語では「話」が補文標識にまで発展していることになる。

現代の美濃客家語の発話動詞の中では「講」よりも表す意味範囲が狭い「話」が、補文標識になるまで文法化が進む可能性はあるのだろうか。現代の美濃客家語で見られる「講」と「話」の意味分布はいつからあり、どのようにして発展してきたか、歴史的な経緯をたどることができれば、この発話動詞の分布の説明ができそうであるが、美濃客家語については古い時代の文献資料は残っていない。

しかし客家語の文献としては、19世紀中旬から20世紀初めにかけて広東省に布教に来た宣教師たちが出版した客家語訳聖書や、客家語の教科書などが存在する。本稿ではこれらの資料を宣教師資料と呼ぶ。宣教師資料のうち、1937年に汕頭の宣教師が編纂した『客家社会生活対話』(上・下) (以下『対話』と呼ぶ) という教科書は、当時の梅県及びその周囲の方言を反映していると考えられる。これらの方言は、美濃の方言とは全く同じものではないが、ある程度近い関係にある。

『対話』の中で「講」と「話」は両方とも発話動詞として用いられている。

(4) 婦人家 常常 亂 講, 唔 怕 害人。 (『対話』67^{註4})
 女性 よく 混乱して KONG しない 恐れる 害する
 「女性はよくデタラメを言って、人を傷つけても気にしないのだ」

(5) 你 話 我 個 間 房 好, (『対話』65)
 あなた VA 私 LNK CL 部屋 良い
 「あなたは私の部屋が良いというが、」

ただし、この2つの発話動詞は用法の上で違いが見られる。本稿はこれらの違いを詳しく分析し、今の美濃客家語で見られる「講」と「話」の用法の違いが、すでにこの文献で見られることを示す。

田中 (近刊) では、主に『対話』の中に見られる「話」の用例の分類と頻度について論じた。本論文では、「講」の用例を中心に考察し、「話」と「講」の用法の違いに基づいて、これらの発話動詞の分布の違いを明らかにする。

本論文は、まず第2節で先行研究について振り返る。次に第3節で『対話』での「講」の用例と頻度について記述する。最後に第4節で「講」と「話」の各用例の頻度について相違点を示し、現代の美濃客家語との関連について仮説を述べる。

II 先行研究

1. Chappell (2008) の研究

Chappell (2008) は、漢語諸語の発話動詞の類型(JIANG 講・SHUO 説・HUA 話)に着目し、これらが文法化して補文標識に至る過程の違いについて類型的に論じている。

Chappell (2008) は、発話動詞が補文標識に至る過程を下記の 5 つの段階に分けた。

STAGE I : Quotative construction (Initial stage)

Syntactic configuration: NP_{subject} (PP addressee) V quotative: [QUOTATION]

STAGE II : Semi-complementizer in V₂ position of a serial verb construction with quotative function (Bridging context)

Syntactic configuration:

NP subject V₁ (X) V₂ [Semi-complementizer/Quotative]: [QUOTATION]

V₁ = speech act

X = {DO, discourse particle, aspect marker, PP, pause, adverb}

STAGE III: Complementizer Stage with cognition verbs (Switch context)

Syntactic configuration: NP_{subject} ... V₁-COMPLEMENTIZER[CLAUSE]

V₁ = speech act; cognition and perception

STAGE IV and onwards: Broadening in scope of verbs taking the complementizer

V₁ = speech act; cognition and perception, emotion and stative verbs

STAGE V: Onset of conventionalization of the complementizer usage

V₁ = speech act; cognition and perception, emotion and stative verbs, modal verbs

(Chappell 2008:59-62)

第 1 段階では、問題となる動詞は引用標識としての機能を持つが、否定詞、アスペクト標識、助動詞と共起することも可能である。第 2 段階は、「準補文標識」と位置づけられ、動詞連続構文の中で他の発話動詞のあとの 2 個目の動詞の位置に現れる。第 3 段階では補文標識として、認知動詞や知覚動詞などの後ろに現れる。第 4 段階では、発話動詞から発展した補文標識の前に、気持ちを表す動詞などが共起する。最後の第 5 段階では、補文標識の用法の慣習化が始まり、「～したい」、「～する必要がない」などといった法助動詞の後ろにも現れる場合がある。

Chappell (2008 : 65) によれば、広東語の発話動詞は第 3 段階、北京語は第 4 段階、台湾国語やいわゆる台湾語は第 5 段階まで文法化が進んでいる。

なお、客家語については、Chappell は「kòng 講」を発話動詞として挙げ、第 2 段階、つまり、「動詞連続の一部としてもうひとつの発話動詞の後ろに現れ、引用表現として用いられる」段階ま

で進んでいると述べている。

Chappell (2008) は、漢語諸語の発話動詞について類型論的な視点から論じており、また、各言語の用例について量的な分析を行っている点が評価できる。ただし、Chappell が用いた客家語のデータは、1957 年に出版された 68 頁の民話のテキストのみである。

次の節で紹介する江敏華(2018)は、客家語の宣教師資料という、より多くのデータを分析することで、客家語の発話動詞の文法化に関する Chappell (2008) の主張への反論を試みている。

2. 江敏華 (2018) の研究

江敏華 (2018) は、Chappell (2008)の研究に基づき、客家語の「話」と「講」の文法化について論じたものである。江敏華 (2018) は、Chappell(2008)が分析の際に用いた資料だけでは量が不十分だと指摘し、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて出版された、『対話』を含む 7 つの宣教師資料について分析を行った。そして、(a)「話」と「講」の役割分担がなされていたこと、(b)「講」の目的語は主に話の内容や種類、ことばであり、「話」の主な役割は直接引用や間接引用を導くことであることを示した (江敏華 2018:721)。また、(c)「話」と「講」には両方とも文法化が進んだ用例があり、客家語の発話動詞は Chappell(2008)が指摘したよりもさらに文法化の度合いが進んでおり、少なくとも第 4 段階に達成していると主張した (江敏華 2018:727)。以下は、江敏華 2018 が 5 つの宣教師資料 (略称「啓蒙」「新約」「擇要」「醫界」「対話」) について、分析結果をまとめた表である (日本語訳は筆者)。

表 1 客家語宣教師資料における「話」と「講」の用例分布

| | | 話 | | | | | 講 | | | | |
|-----------------------------|------------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | | 啓蒙 | 新約 | 擇要 | 醫界 | 対話 | 啓蒙 | 新約 | 擇要 | 醫界 | 対話 |
| 動詞 | 目的語なし | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |
| | 聞き手+VP | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |
| | 言いつける という意味 | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | × | × | × | × | × |
| | +直接引用 | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | × | × | × | ✓ | ✓ |
| | +間接引用 | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | × | × | × | × | × |
| | +名詞目的語 | × | × | × | × | × | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |
| 引用 表記 | | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | × | × | × | × | × |
| 補文 標識 | | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | × | × | × | × | × |
| その 他の 文法 化した 用法 | “(唔) 敢 話”(認知的 モダリティ) | ✓ | × | × | × | ✓ | × | × | × | × | × |
| | 仮定条件文 | × | × | ✓ | × | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |
| | トピック標 識 | × | × | × | × | × | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |
| | 伝聞、意外 の標識 | × | × | × | × | × | ✓ | × | × | × | × |

(江敏華 2018: 723 に基づく)

ただし、江敏華（2018）の研究は、7つの宣教師資料から得られる状況をまとめて論じているため、個々の資料における「話」と「講」の用法の違いが見えにくい。そのため、この2つの動詞の発展の道筋をたどるには各資料における2つの動詞の用法にどの程度の使用頻度の差があるのか、また、時代によって各用法の頻度の違いが見られるのかを検討する必要がある。

その研究の取り掛かりとして、田中（近刊）では、『対話』の「話」の用例とその頻度について調べた。その結果、江敏華（2018）の言うところの文法化した用法は、用例としてはそれほど多くはなく、第4段階に進んでいるといっても、まだ発展の度合いは不十分であるという点を指摘した。本稿では「講」の用例について統計的データを示し、「話」の用例と比較する。さらに、現代の客家語の用例との関係について述べる。

Ⅲ 『対話』の中の「講」の用例

1. 『対話』について

第1節で述べたように、『対話』は、フランス人宣教師の Charles Rey が執筆したもので、当時の嘉応州（梅県）及び周辺の客家方言を反映している（ラマール 1996: 48）。本稿では田中（近刊）と同様に、『対話』のリプリント版と台湾の中央研究院作成のコーパス「閩客語典藏」を資料として用いる。

2. 「講」の用法

2.1. 自動詞用法

『対話』の中で「講」の用例は374例あった。このうち、「講解（注釈する）」、「講究（列挙する、深める）」などの動詞複合語や名詞複合語に含まれるものが12例あるが、本稿では分析対象から除外する。

『対話』と同じく、Charles Rey が編集した辞書に『Dictionnaire Chinois-Français Dialect Hakka』がある。これによれば、「講」の意味は、「話すこと、語ること、語り手、説明すること、釈明すること、詳しく述べること、演説すること、議論すること、審議すること。言葉で興奮させる、非難の言葉をかける^{注5}。」とある。

なお、一般的な発話を表すほか、下記のように「招く」という意味に解釈できる用法もあった。

- (6) 有 講 吹鼓手 麼？
 実現する 招く 楽師 Q

「楽師は呼んだのですか？」（『対話』：62）

本稿では、下記のように後ろに目的語をとらないもの、または補語やアスペクト助詞が後ろにくるが目的語をとらないものを「自動詞用法」に分類することにする。連体節の一部と考えられる3例を除くと、このような例は93例あった。

- (7) 裡 我 知， 唔使 講。（『対話』13）

これ 私 知る 必要がない KONG

「そのことは、私は知っています。おっしゃる必要はありません。」

- (8) 講 俤 了, 那 放學 麼? (『対話』334)

話すまとめる ASP では 授業が終わる Q

「話し終わりましたか、では授業は終わりですか」

2.2. 他動詞用法

(1) 名詞句を目的語にとる場合

江敏華(2018)は、宣教師資料では「話」は名詞目的語をとらないが、「講」は名詞目的語をとると記述している。『対話』中で「講」が名詞目的語をとる場合は、53例である(連体節中の10例を除く)。このうち、「講話(話をする)」が32例^{注6}、その他のイディオム「講價(値切る)」、「講笑(冗談を言う)」、「講道理(説教する)」などの慣用表現が8例あり、決まった目的語をとる場合が多いことがわかる。

(2) 名詞句を目的語にとり、動詞連続構文となる場合

「話」と同様に、下記のような「講+人+知(人に話して聞かせる)」「講+人+聽(人に話して聞かせる)」という言い方がある。

- (9) 神父 講 我 知, 有 那個 事? (『対話』:27)

神父 KONG 私 知る ある なに 事

「神父さん、一体何事ですか?」

- (10) 請 講 我 聽。(『対話』:379)

どうぞ KONG 私 聞く

「教えて下さい。」

なお、「講」のあとに直接目的語と間接目的語の2つを取る場合もある。

- (11) 我 講 條 故事 你 聽。(『対話』:419)

私 KONG CL 物語 あなた 聞く

「あなたに話す話があります(=話があります)」

江敏華(2018)が指摘しているように、現在の台湾の客家語では、同じことを言いたい場合、言う相手を表す名詞の前に与えるという意味を表す「分」という語を置き、「講分你知」、「講分你聽」と言う場合が一般的である(江敏華2018:715)。

『対話』でも次のように伝える相手を表す名詞の前に「分」を置いた例が7例見られた。

- (12) 你 詳細 講 分^{注7}我 聽。(『対話』:180)

あなた 詳しい KONG 与える 私 聞く

「(あなたは)私に詳しく教えて下さい」

ただし、「分」がない例は46例であることから、この時代は「分」がないほうが主流であることがわかる。

(3) 引用句を導く場合

江敏華(2018)は、宣教師資料の中で「講」が間接引用を導くのは『対話』の中の下記の1例だけであったと述べている。

- (13) 你 又 講 做生理 咁 難, (『対話』:99)
あなた また KONG 商売をする 大変 難しい
「あなたはまた商売がとても難しいと言っていますが」

しかし、江敏華(2018)における直接引用と間接引用の定義は明らかではない。

また、英語と異なり、客家語は直接引用と間接引用には形式上のはっきりした区別がない。したがって、本稿では、①「講」の後ろに発話の内容が続く場合を「引用」とみなし、②コンマやコロンがある場合を直接引用(例14, 15), そうでない場合(例16)を間接引用として分析することにする。

- (14) 有俗語 講: 你 用 人 不 疑, 你 疑 人 不 用。
ある俗語 KONG あなた 使う 人 しない 疑う あなた 疑う 人 ない 使う
(『対話』15)
「誰かを雇ったら疑うな、疑うなら、雇うな」ということわざがあります。」
- (15) 成擺 人 講, “天 麼 唇, 海 麼 底”, (『対話』196)
ときどき 人 KONG 空 ない 縁 海 ない 底
『空は無限で、海には底がない』と言われることがあります。」
- (16) 你 講 體操 咁 重要; (『対話』580)
あなた言う 体操 とても 重要
「あなたは体操がとても重要だと言っていますが、」

この分類で数えたところ、「直接引用」は38例、「間接引用」は38例の合計76例あった。

(4) 引用標識、補文標識と考えられる場合

引用標識と考えられる場合は1例もなく、補文標識のうち、Chappell(2008)の言う第3レベルと考えられる場合は、下記の一例だけであった。

- (17) 個 地方 聽 講 遭 過 咁 多 次 共產, (『対話』451)
この 場所 聞く KONG 遭う ASP こんな 多い 回 共產
「この場所は何度も共産党に攻められたことがあるそうですね」

また、下記のように、文法化がさらに進んでいるとみなせそうな例が2例見られた。

「係」はコンピュータで発話動詞ではないので、この点では補文標識としての文法化が第4段階まで進んでいるといえそうである。ただし、数は2例のみである。

- (18) 有 三三, 五五 後生人, 在 間間 𨋖裡, 就 係 講 學 打拳,
ある 数人 若者 ~で ひま 遊ぶ すぐ COP KONG 学ぶ ボクシング
和 唱 流民歌
と 歌う 流民の歌

「数人の若者が暇で何もすることのないのですぐにボクシングや流民の歌を覚えてしまうのです。」

- (19) 先生, 唔 係 講 讚美 你;
 男性への敬称 ~ない COP KONG ほめる あなた
 「ミスター, あなたにお世辞を言っているわけではありません。」

2.3 その他の文法化した用法

江敏華(2018)が他の宣教師資料について指摘しているような, 文末に現れて伝聞を表す用例は『対話』では見られなかった。ただし, 「~來講(についていえば)」という話題を提示する用法は6例, 「照~講(~によると)」という用例は7例あった。

- (20) 祭衣 來講, 一 歡 一 歡, 愛 攤開來 晒。(『対話』21)
 祭服 についていえば 1 枚 1 枚 すべき 並べる 干す
 「祭服についていえば一枚一枚並べて干さなければならない」
 (21) 照 你 講, 體操 係 鍛鍊 身體; (『対話』582)
 よる あなた KONG 體操 COP 鍛える 体
 「あなたによれば, 體操というのは体を鍛えるものなのですね」

IV まとめ

1. 「講」と「話」の用法の比較

3節で述べた「講」の用法と, 田中(近刊)で調べた「話」の動詞, 引用表現, 補文標識としてのデータを比較する。

表2 「話」「講」の名詞用法の割合

| | 話 | 講 |
|------|---------------|--------|
| 名詞用法 | 115 (全例中 37%) | 0 (0%) |

表3 「話」「講」の動詞用法の分類と頻度

| | | 話 | 講 |
|-------|-------------------------|------------------|----|
| 動詞用法 | 目的語を持たない | 29 ^{注8} | 93 |
| | 目的語(名詞句)を持つ | 6 | 53 |
| | 話/講+人+聽 | 0 | 23 |
| | 話/講+分+人+聽 | 0 | 5 |
| | 話/講+人+知 | 11 | 23 |
| | 話/講+分+人+知 | 0 | 2 |
| | 話/講+人+VP(一般動詞)「~にいいつける」 | 2 | 0 |
| | +直接引用 | 60 | 38 |
| +間接引用 | 56 | 38 | |
| 引用 | | 9 | 0 |
| 補文標識 | (Stage3)聽+話/講 | 4 | 1 |

| | (Stage4?) 係話～ | 3 ^{注10} | 2 |
|----------------|---------------|------------------|-----|
| 補文標識以外の文法化した用法 | | 15 | 13 |
| 連体修飾語 | | 3 | 16 |
| 合計 | | 166 | 315 |

上の表から、次のことがわかる。

ア) 「話」の用例中約 4 割が名詞用法であるのに対し、「講」は一例もない。したがって、この時代の汕頭周辺の客家語では、すでに「講」の方が、動詞としての性質を強く持っていた。

イ) さらに、引用用法の用例を見る限り、「話」の方は直接話法が動詞用法の全用例中 30%、間接話法が 29%、「講」の方がそれぞれ 10%であり、直接引用と間接引用を合わせると「話」は約 60%、「講」は 20%であるため、「話」に比べると「講」が引用を導く用例は少ないことがわかる。さらに、文法化が進んだ「引用標識」「補文標識」の用法は更に少ない。この段階では、「話」のほうが直接引用／間接引用→引用標識→補文標識へと進む可能性が高いと言える。したがって、現代の台湾の客家語で「講」のほうが主な発話動詞として用いられること、補文標識として発展していることについては、台湾への移住のあとの変化である可能性がある。

ウ) 「～に…を教える」という意味を表す動詞連続構文において、少なくとも『対話』においては、話は「知」としか組み合わせられないこと、また、「分(与える)」という語が入る例がないことから、「話」と「講」では動詞の意味や機能に違いがあり、「話／講(分)+人+聽」に比べて、「話／講+人+知」がすでに単なる動詞連続構文から慣用的な表現になりつつあること、が考えられる。この問題については引き続き検討したい。

2. 『対話』中の発話動詞の文法化と美濃方言の中の「va55」

第1節で述べたように、美濃の客家語で va55 という語が実際に「話」から発展した補文標識かどうかは確認することが難しい。自然な用例自体が少ない上、文献等を根拠に証明することが難しいからである。しかし、『対話』の中で「話」が「講」よりも多く補文標識として用いられていることを考えると、補文標識の va55 という語が、「話」から文法化したと仮定することは不自然ではない。さらにもう一つ指摘したい点は、対面調査の際に「va55」は発話動詞の後ろに来ることはできるが、認知、知覚、気持ちを表す動詞(覚えている、羨ましく思う、恐れる、思い出す)の後ろに来ることはできないという点を確認したことである。Chappell(2008)の提案した発話動詞の発展の5つの段階では、認知、知覚、感情を表す動詞の後ろに補文標識の「話」が現れる段階は、他の発話動詞の後ろに現れる段階よりも先のレベルにある。したがって、美濃の補文標識「va55」が「話」に関係があるとすれば、Chappell(2008)の提案した発展段階に沿って文法化が進んでおり、この第2段階にあると考えられる。

【注】

注1 この方言は広東省梅県で話されている客家語と同じ方言グループに属し、台湾では「南部四縣

話」と呼ばれているもののひとつである。

注2 この言語の音素目録は下記の通りである。

子音： p, p' [p^h] t, t' [t^h], k, k' [k^h], ts [ts ~ tɕ], ts' [ts^h ~ tɕ^h], m, n, ng [ŋ],
l, f, s [s ~ ɕ], h, v (ts, ts', s の口蓋化は i の直前においてのみ起きる)

母音： a, o, e, i, ii [i], u 声調 / 33, 11, 42, 55, 2, 51

注3 本論文で用いる略号は、次の通り；ASP アスペクト標識, CL 類別詞, COP 繫辞, KONG 動詞「講」と同源と考えられる語, LNK 連結小詞, Q 疑問小詞, VA 動詞「話」と同源と考えられる語

注4 『対話』ページ数。なお、ページ数はリプリント版に基づく。

注5 Dire, parler, raconter, expliquer, récit, explication. – Dissarter, discourir, discuter, délibérer. Exciter par la parole, adresser un reproche. (747p.)

注6 発語動詞が同義の名詞「話」を目的語ことる例が多いというのは、Chappell (2008) でも指摘されている。

注7 原文では、「分」の右に「リ」。

注8 田中(近刊)から再検討し、29例に修正。また、引用標識の数の修正と、「其它虚化用法(その他の虚詞化用法)」の「假设条件句(假定条件文)」から補文標識の第4段階への修正も加えた。

【参考文献】

- ・ラマール・クリスティーン「可能補語考(II) —客家語資料の場合(上)」『女子大文学国文篇』(大阪女子大学国文学科) 47号, 47-60頁, 1996
- ・田中智子「客語言説動詞“話”の功能及其演变初探—以《客家社会生活對話》为例」『汉语语言学』(中山大学中文系) 第二輯, 近刊
- ・江敏華「客語傳教士文獻中所見“話”與“講”的語法化與詞匯/彙化」, 何大安等主編『漢語與漢藏語前沿研究: 丁邦新先生八秩壽慶論文集』 社會科學文獻出版社, 711-724頁, 2018
- ・Chappell, Hilary “Variation in the grammaticalization of complementizers from *verba dicendi* in Sinitic languages” *Linguistic Typology*, 12, 45-98, 2008
- ・Rey, Charles *Dictionnaire Chinois-Français Dialect Hakka*, Hong Kong, 1901/1926. Reprinted by Southern Materials Center, Taipei, 1988
- ・Rey, Charles *Conversations chinoises prises sur le vif avec notes grammaticales: Language Hac-Ka* Vol.1-2 (『客家社會生活對話(上)(下)』) Hong Kong, Nazareth Press, 1937. Reprinted by The Chinese Association for Folklore, Lou Tsu-k'uang (ed.), Taipei, 1973

中央研究院『閩客語典藏』

<http://minhakka.ling.sinica.edu.tw/bkg/index.php> (2020/11/02 閲覧)

【謝辞】

原稿を注意深くお読み頂き、貴重なご助言を頂いたことに対して、お二人の匿名査読者および野島本泰氏に感謝いたします。